六篠会報

No.16

発行／神戸市灘区六甲台町1　神戸大学農学部内　六篠会（りくそうかい）（神戸大学農学部同窓会）
連絡用FAX：078-881-2752　E-mail：rikusou@ans.kobe-u.ac.jp

神戸大学百年記念館（平成13年1月竣工）

CONTENTS

「会長就任のご挨拶」　北浦　義久 ……2
「神戸大学と農学部はいま」　相薗　泰生 ……2
同窓生は今　①初めての国際会議に参加して　柳　由貴子 ……3
②兵庫県の農業振興に活躍する六篠会員　大谷　良逸 …4
総会報告　①六篠会活動の構築に向けて　中村　直彦 ……4
②兵庫県科学賞を受賞して　津川　兵衛 ……5
③兵庫県科学賞を受賞して　辻　荘一 ……5
④六篠会をふり返って　東　順三 ……5
⑤思い出の「六篠会」　西川　欣一 ……6
⑥六篠会への回顧　田中　平義 ……6
支部会だより　①KOBE六篠会　岡野　光世 ……6
②県六篠会近況報告　松本　幹夫 ……7
③関東支部の近況について　和泉　孔庸 ……7
④東海支部の近況について　上田　洋 ……7
⑤和歌山支部結成はいつになるのか？　宇杉　興一 …7
⑥延喜会近況報告　久下　平 ……8
六篠会からのお知らせ　①六篠会支部活動に本部から援助　中村　直彦…8
②学友会だより　西川　欣一 ……8
③神大クラブ（KUC）に入ろう　中村　直彦 ……8
④神戸大学創立百周年記念事業への協力のお願い　王子　善清 …8
記　事　PFI手法の導入による「神戸フィッシャリーナ」の整備について　中村　直彦……9
庶務報告 ……10
12年度決算 ……10
13年度予算 ……10
六篠会活動への参加にご協力ください ……10
編集後記 ……10

「会長就任のご挨拶」

―母校神戸大学の更なる発展のために―

六篠会会長　北浦　義久

六篠会会員の皆さん、お元気でご活躍のことと心からお慶び申し上げます。

20世紀から21世紀へ、時代が大きく変わる時を迎えました。20世紀は戦争による破壊と、科学技術の進歩による、創造の世紀であったと言われています。

21世紀を迎え、少し明るい展望が開けるのではと期待をしておりましたが、経済の低迷に加えて、9月には米国に於ける同時テロの発生によって、6千人余の生命が奪われるという誠に忌まわしい事件が発生し、厳しい新世紀の出発となりました。

さて、私こと本年5月19日の六篠会総会において、会長に選任され、新家先輩の後を受け、重責を担うこととなりました。何分初めてのことであり、力不足の私にとって重荷ではありますが、会員の皆さんの温かいご支援とご協力によって、六篠会の発展に尽くしたいと、決意を新たにしておりますので宜しくお願いします。

先輩の西川、新家両会長共に神戸大学に籍を置かれ、学内事情に精通されておりましたが、学外で活動してまいりました私にとって、大学の内部は正に未知の世界でもあります。

幸い、多くの後輩の皆さんが学内に残り、活躍されておりますので、いろいろとご支援を頂きながら、会の運営にあたって参りたいと考えております。

母校への思い

我等が母校、神戸大学農学部も、昭和24年兵庫農科大学として、丹波篠山、盃山の麓で呱々の声をあげてから50有余年、その間昭和41年には現在地の六甲台へ移転し、神戸大学農学部として、着実な歩みを続けて参りました。

篠山に学んだ兵庫農大卒業生にとって、丹波篠山は青春の思い出の地として、また心の故郷として、今もなお強く、印象に残っていることと思います。

また、六甲台に学んだ神戸大農学部卒業生の皆さんにとって、六甲山の豊かな自然や、港都神戸の思い出がつきないものと思います。

さらに、加古川のいなみ野に学んだ、兵庫農短大卒業生の皆さんにとって、母なる川、加古川と豊穣の地、加古川平野の中で過ごした青春の一時が今も生き続けていることでしょう。

六篠会会員の皆さんには、それぞれ異なった歴史を背負っておられますが、六篠会員として、お互いに心を一つにして自らを磨き、母校の発展のために努力を続けていきたいものです。

六篠会の現状

さて、この六篠会も会員数が8千人を超え、地元関西をはじめ関東や東海等、全国各地域、さらに外国にも雄飛し、各分野にわたり活躍され、多くの功績を上げられておりますことは、誠に慶びに耐えません。

同窓会活動も本部の活動の他、地域や職域でも支部を結成され、積極的に活動されています。

私も本年7月には関東支部、また9月には東海支部の総会に出席させて頂き、会員の皆さんの活動ぶりに接し、非常に感動しました。

また、職域では兵庫県職の「県六篠会」、神戸市職の「KOBE六篠会」、酒造関係の「延喜会」など、それぞれ個性的な活動を続けられています。

神戸大学の現状と大学改革問題

兵庫農大から神戸大学農学部へ、50有余年の歴史を重ね、その間学部の充実が図られるとともに、大学院も設置され、今日では5学科、12講座、42教育研究分野を擁する農学部として、関西地区における重要な地位を占め、農学の発展に大きな役割を果たしています。

しかし、少子高齢化の伸展に伴って、子供の数が急激に減少し、将来学生の確保も困難となり、大学の統廃合もさけて通れない現実となりつつあります。

さらに、行財政構造改革が政治の大きな課題となり、各般にわたる構造改革が進められています。こうした背景のもと、昨年文部科学省において、国立大学の独立法人化が示され、また本年6月には国立大学の「構造改革の方針」が発表され、民間的な発想に基づく経営手法と、競争原理を導入する方針が打ち出されました。

改革の一つは、国立大学の再編、統合を進め、現在99ある国立大学を大幅に減少させるというものであり、もう一つは、優れた業績を上げた大学には、予算を重点的に配分し、世界に通じる大学を30校育成するというものです。

大学にとっては、これまでにはない大きな変革期を迎えており、将来へ向けての大改革が避けて通れない課題になっています。

こうした中で、神戸大学と神戸商船大学の統合問題が浮上し、両大学の統合を目指した協議会が設置され、平成15年10月までに新大学設立の細部について詰め、平成16年4月から新たな大学として、スタートする方向で検討が進められているようです。

神戸大学100周年記念事業について

母校神戸大学も平成14年には、創立100周年を迎えることになっています。この100年の節目を記念して、大学の同窓会が中心となって、神戸大学創立100周年記念事業後援会を設置し、支援していくことになりました。

六篠会もこの後援会に参画し、協力していきたいと思います。記念行事の開催や国際交流事業促進基金の設立等が計画されており、会員の皆さんにも協力要請がなされると思いますが、その節には、母校神戸大学の更なる発展のため、積極的な協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆さんの益々のご健勝とご多幸、さらに一層のご活躍をご祈念申し上げ、ご挨拶とします。

「神戸大学と農学部はいま」

農学部長　相薗　泰生

学部の世話を仰せつかって、早いもので2年の任期も余すところ4ヶ月ほどになってしまいました。この間、神戸大学の1学部として、文部科学省が示した（1）大胆な大学の再編・統合―大学の活性化、（2）民間的発想の経営手法の導入―「国立大学法人」への早期移行、（3）第三者評価による競争原理の導入―世界最高水準に育成、を骨子とする「国立大学の構造改革の方針」への対応準備に、また、自然科学研究科の改革、学部附属農場の改革に、学部教官と共に、極めて多忙な日々を過ごしてきました。

大学に法人格を与え、自主・自律性と自己責任を拡大することにより、活力を生み出させ、学術研究と高等教育の質や水準の高度化を目的としている「国立大学法人化」では、大学の裁量は拡大されるものの、外部評価機構（例えば、文部科学省の大学評価機構）による評価結果に基づいて大学への予算配分が査定されるなど、自己責任が厳しく問われることになります。これからの教官は、研究費として外部資金の獲得に腐心しなければならない実情がこの厳しさを示しています。いつまでもぬるま湯に浸かっていることは許されず、今後、教育・研究に対する自己啓発と、社会に対する責任の緊張感が要求されることは必至と思われます。

神戸大学では、今年2月に学長が交代し、従来の学長、副学長に加え、学長補佐3名と、企画調査室員数人を置いた新体制を組み、研究・教育主力の総合大学として、また、世界へ開かれた大学として、法人へ移行する事と産学連携の強化を見据えた新しいビジョンの展開を図っています。

今のところ、神戸大学は、文部科学省が予定している平成16年度の国立大学法人化に歩調を合わせて法人へ移行することを目指して、「法人化後6年間の中期目標、中期計画」を策定中であり、農学部も資料の収集、提供に努力しています。

また、神戸市東灘区の深江に本拠を置く神戸商船大学との統合を検討中で、近々、「海」に関係した新しい学問領域を加えた総合大学として再編され出発することになると思います。

現在、農学部は、学部長、評議員（2名）、学生部長、自然科学研究科長、遺伝子実験センター長、共同研究開発センター長を擁して活発に活動しながら大学運営に貢献しています。なかでも、遺伝子実験センターと共同研究開発センターは、本年度から、拡充・整備を終えた新組織として、農学関連の研究を今まで以上に積極的に展開しています。特に、農学領域のバイオサイエンス、バイオテクノロジーに関連して、環境遺伝子分野（Enviromental Genomics）の研究並びに産学共同研究で、質、量ともに他の大学に類を見ない研究を展開していて、全国大学のなかでも特徴ある農学部として発展し続けています。

さらに、農学部の研究体制を強化することを指向して、農学部附属農場の組織改革を検討しています。従来の農産物生産体制から、学部教官と農場教官が協力してフィールド科学の研究を行なう「食料遺伝資源教育研究センター（仮称）」へ変わることを計画しています。改組が実現しますと、このセンターは、学部学生の農場実習及び牧場実習の機能を継承しながら、新たに教官の研究と、大学院生の研究の場としての機能を果たすことになります。

一方、文部科学省の全国大学施設整備計画に沿って、農学部学舎の改修問題も浮上しています。現在、農学部の教育・研究機能の向上と、快適な教育・研究環境の創出を念頭においた学舎の全面改修計画案を作成しています。

紙面の都合で、農学部の情報の全てをお知らせすることは不可能ですが、情報社会を迎え、学生と一般の方々に農学部の情報を提供するため、広報委員会が精魂込めて作成した学部紹介をホームページに掲載していますので、是非一度、http://www.ans.kobe-u.ac.jpにアクセスしてください。さらに、このホームページの1ページの末尾にある「全国大学農学系学部長会議」へリンクして頂くと、そこには、「我々は農学をこのように提言する」、「21世紀の農学」など、これからの農学の進む道が示唆されています。

いつの時代にあっても、創造的発展を志しますと多くの克服すべき障害に遭遇するのが常と思います。いま、農学部は、まさにこの状況にあり、生みの苦しみに耐えているとも言えますが、学部教官は、現在の大きな変革の流れのなかで、農学の生命科学領域で新たな進展を目指し、教育・研究に真摯に取り組み努力を重ね、学部と大学の発展に多大な貢献をしていることを皆様にお伝えできることに誇りを感じます。

神戸大学農学部の社会における評価は、このような教官の活動はもとより、同窓生諸兄姉の活躍に負うところが大きいと申しても過言でないと思います。最後に、それぞれの立場で、持てる力量を最大限に発揮して活躍されますことを期待して筆を置きます。

同窓生は今

初めての国際会議に参加して

大学院自然科学研究科（博士課程後期）
柳　由貴子（神BE28回）

私は、昨年の夏から今年の春にかけて、フランス、スコットランド、アメリカの3カ国を連続して訪れました。まず、昨年7月21日より国際腐植物質学会第10回国際会議(IHSS 10)に参加するために、土壌学研究室の藤嶽先生と一緒にフランスのトゥールーズという町に約1週間滞在しました。その次に、スコットランドの土壌並びに河川水の調査、採取のために、約3週間Great Britain島の北半分を藤嶽先生とドクターの後輩一人と共にあちこち旅して回りました。その後、単身でアメリカに渡り、ペンシルバニア州立大学の土壌生化学研究室でResearch Scholarとして酵素を用いた腐植物質の分解に関する研究を行うために、今年の3月末まで約7ヶ月間過ごしました。このような長期間の海外生活の中で様々な経験をすることができましたが、今回は、フランスでのIHSS 10について、報告させていただきます。

国際腐植物質学会は、1981年に設立され、2年ごとに国際会議を開催しています。今回の第10回会議は'Entering the Third Millennium with a common approach to Humic Substances and Organic Matter in Water, Soil and Sediments'をテーマに、招待講演と一般講演が51課題行われ、250課題のポスター発表が行われました。出席者は36ヶ国、300余人で、日本からは8名が参加しました。この会議に参加してまず感じたことは、日本の学会よりも女性の研究者が多いということでした。今回の発表では、おそらく半数が女性であったと思われます。ヨーロッパは女性研究者が多いということを聞かされていましたが、これほどまでとは思っていませんでした。これからは、日本でも女性がもっと頑張らねばと痛感しました（農学部の博士課程の女性たち、頑張りましょう！）。また、参加者の分野は、土壌、水質、地球科学、分析化学など多岐にわたるため、講演内容もバリエーションに富んでいました。そのため、情報交換をしているときにお互いの認識が異なっていることがしばしばあり、すれ違いも時にはありました。講演は、1．起源と特徴付け、2．有機物との相互作用、3．重金属や鉱物表面との相互作用、4．生物地球化学的循環（水、土壌、堆積物）、5．植物との相互作用、6．商業的および工業的利用、7．腐植物質の特徴付けのための新規分析法の開発、という7つのトピックスについて行われました。大会初日に行われたY. Tardy,J-R. Bailly,M.Guiresse,M. Kaemmerer,M. P. Boutin,およびJ-C. Revel (Institut National Polytechnique de Toulouse)博士らによる講演では、環境中の様々な起源から得られた腐植物質のデータを元に腐植物質に対する熱力学的アプローチが紹介されました。その他、今回の会議では、数年前まで腐植物質関連の研究を凌駕していた^{13}C-NMR, ^{15}N-NMRによる分析に関する報告は少し減少気味のようでしたが、依然として腐植物質の構造とモデルに関する報告、特に腐植酸の平均分子量に関する報告が多く見かけられました。また近年腐植化学の中で注目を浴びてきている環境汚染物質との相互作用に関する研究も多数みられ、それぞれの発表に対して、活発な議論が行われました。著名な先生方が激しく火花を散らして討論されている姿が非常に印象的で、このようなアグレッシブさがあってこそ一流の研究者として活躍されておられるのだと感じました。

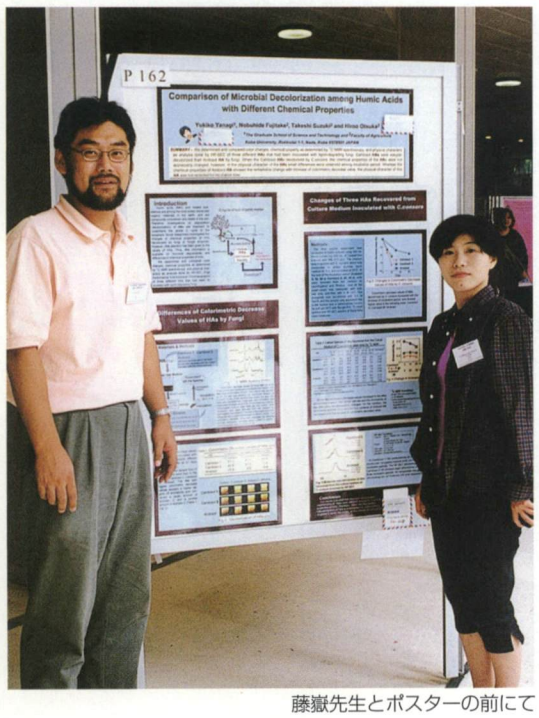
ポスター会場風景

ポスター発表は、スケジュールの前後半で2日間ずつに分かれて行われました。ワインやチーズなどのトゥールーズの地元の味を試食しながらの発表は、始終和やかに行われていたようでした。しかし、私にとっては参加するのも発表するのも初めてでしたので、緊張しました。一番プレッシャーを感じたのは、英語で質問しなければならないことでした。この会議がアメリカ留学後であったら、もうすこし抵抗なく話しかけることができただろうと悔やまれます。次に、ポスターを見てすぐに質問することができなかったことです。質問するべきことがあっても、うまく伝えられなかったことや、質問を切り出すことができなかったため、せっかくのチャンスを逃してしまい残念な思いをしました。後半2日の私の発表では、全く誰にも興味を持ってもらえなかったらどうしようと心配していたのですが、予想以上の方が足を止めてくれました。また、出発の前日にようやく仕上がったポスターでしたが、評判もそこそこでしたし、原稿もなく、練習不足の私の説明にも熱心に聞いてくださった方もいて、思っていたよりもうまくいった方だと思います。話をした中では、特にルーマニアの女性研究者の方で、日本の土壌、特に火山灰性土壌に興味を持っておられた方が印象的でした。用意していた土壌断面の写真を見せながら、いろいろと話をすることができました。また、私の説明があまりにもつたなかったため、横で見ていた藤嶽先生が思いあまって助け船を出そうとされたのですが、その女性が"彼女の発表なのだから、スーパーバイザーは黙ってみてなさい"と言って、押しとどめてくれたのも思い出の一つです。もっとしっかり、説明できるようにこれからは頑張ります。また、ロシアの女子学生の一人が、観点は違うものの私の研究と関連した発表をされていました。彼女とは、お互い早く論文を出すことを約束しました。今まで、論文のなかで同じ関連の研究を行っている人が存在することは認識していましたが、今回そのうちの一人に実際に会ってみて、自分の研究は見当はずれではないということと、ライバルの存在を再認識しました。

エクスカーションでの昼食風景

エクスカーションは、会議中日におこなわれました。バスで大学を出発して、トゥールーズ近郊の古城へと向かい、その広い庭で昼食をとりました。気候も良く、緑が美しい庭と煉瓦造りのお城を見ながらの食事はいっそうおいしく感じました。お城の中も見学したのですが、調度品や内装は年代を感じさせる美しいものでした。今は、一部の部屋をホテルとして使用しているそうなので、もし再び訪れることがあれば今度は宿泊客として来たいと思います。そのあと、一面ひまわりの畑風景を見ながら、アルビという小さな町に到着しました。この町では、ロートレック美術館とセントセシル教会を見学しました。ロートレック（Henri de Toulouse-Lautrec, 1864-1901）はムーランルージュのポスターなどで有名な画家ですが、それ以外の作品を見たのは初めてでした。大判のポスターから葉書大の落書きのようなものまで、数多く展示してありましたが、なかでも子供が書いた絵のような自画像と象の絵が気に入りました。美術館の建物も、古い建造物で庭も非常に手入れが行き届いており、美しいものでした。教会は14世紀に建てられたもので、中ではちょうどパイプオルガンの演奏が行われていました。そのあとのオプションのディナーは、森の中にある大きなお屋敷の庭に張られたテントの中で食事をとり、大変おいしかったです。本当に、フランスのイメージをそのままに、贅沢なエクスカーションで大満足の一日でした。エクスカーションのほか初日の夕方にも、タウンホールでウェルカムパーティが行われるなど様々なイベントがあり、そのたびにワインと食事のおいしさ（たとえ学食ランチであっても）に感動し、フランスという国らしさにふれた気がします。

学会発表だけでなく、そのあとの調査や留学の準備などもあり、あわただしく気も焦る中での今回の国際会議でしたが、私にとっては非常にプラスとなる体験でした。特に、海外で研究をめざしている同年代の人や、活躍されている研究者の方々の話を直に聞くことができ、負けてはいられない、頑張ろうという気持ちになりました。また、自分の考えを表現することの重要性、難しさも痛感しました。次回、2002年夏にボストンで行われるIHSS 11にも是非参加して、さらにいろいろな研究者の方と情報交換を行いたいと考えています。最後になりましたが、今回の国際会議の渡航費を援助していただいた六篠会に深く感謝いたします。



藤嶽先生とポスターの前にて

兵庫県の農業振興に活躍する六篠会員
―試験研究機関を中心に―

兵庫県立中央農業技術センター
大谷良逸（兵C13回）

兵庫県に就職した六篠会員の活躍を紹介します。

兵庫農科大学及び神戸大学農学部を卒業し、兵庫県に奉職した六篠会員はこれまでに206名になります。その内すでに38名の先輩が退職されています。現在、168名が各部署に配属され、兵庫県政の推進に活躍しています。企画管理部3名、姫路工業大学の教官4名、県民生活部14名、産業労働部2名、農林水産部131名、県土整備部4名、長期ビジョン部2名、教育委員会3名、出納事務局2名、議会事務局1名、県警3名です。とくに、農林水産部が78％を占め、行政各課21名、農林（水産）振興事務所15名、土地改良事務所19名、農業改良普及センター36名、中央・北部・淡路の3農業技術センター40名となっています。

兵庫農大第1回卒業生が奉職された昭和28年当時は、世界大戦後の食糧難の時代でした。この頃の農業施策は、戦後まもなく制定された「農業基本法」をベースに推進されました。肥料や農薬等の農業生産資材や農業機械の開発、品種改良と栽培技術の開発、未利用地の農地開発等による食糧増産施策が中心になっていました。この当時の水稲収量は10アール当たり300kg前後でありました。先輩諸兄の懸命のご努力により昭和30年代中頃には380kg前後に増え、最近では520kgにまでなっています。水稲栽培技術が加速度的に開発されたことを示しています。

私が卒業した昭和40年頃には、基礎的な技術はほぼ開発し尽くされ、これらの技術を駆使した水稲の高収量を競う気運がありました。米づくり日本一を目指して、10アール当たり600kg以上の高レベルで競われていました。しかし、昭和40年代中頃になって、あまりの増収と国民の米離れがわざわいして、米余り現象が出始め、減反政策がとられるようになってきました。

食に対する国民の欲望は止まるところを知らず、量的満足が得られると質的要求が出始めました。産業の高度成長と相まって、公害問題が社会的課題となり、昭和45年12月に開会された臨時国会において多くの公害事案が審議され、公害防止に関する多くの法律が制定されました。農業に関する法律では、「土壌汚染防止法」が制定され、カドミウム等重金属による農用地の汚染防止対策が研究対象となりました。また、この時「農薬取締法」も改正され、農薬残留に関する条文が追加されました。「食品衛生法」と相まり、農産物・食品の安全性確保が、法律で義務づけられることになりました。これに伴い、各県の農業試験場において、農薬残留に関する試験研究が開始されることになりました。

昭和50年代以降には研究対象も多岐にわたるようになりました。作物関係では収量重視型の品種から食味重視型の品種へと育種目標が変わってきました。また、栽培面においても乾田直播栽培や湛水直播栽培の技術開発に取り組むようになりました。とくに、兵庫県は全国に自慢できる"山田錦"という酒米を持っていますが、この頃には"兵庫北錦"や"兵庫夢錦"等の新しい酒米品種が次々発表されました。

野菜関係では、施設園芸資材の開発による周年供給体制の確立や、露地栽培における機械化省力栽培技術の開発に取り組まれるようになってきました。また、地域特産作物の育成を目的として、新規作目の導入試験にも積極的に取り組みが開始されました。

兵庫県の果樹は多くの品目が栽培されています。県北部の二十世紀梨、中央部のブドウ、クリ、南部のイチジク、淡路島のビワ、柑橘等が主なものですが、この頃には収量増加と省力化を目指した剪定技術の開発が盛んに行われました。

花きでは、新テッポウユリ、バラ、キンセンカ、キク、カーネーション等の切り花を対象にした栽培技術改善試験と、新品種導入試験が中心でありましたが、この頃から花壇苗等鉢物の栽培試験が開始されるようになりました。

土壌肥料では、これまでの化学肥料に関する試験研究から、汚泥やコンポスト等の有機廃棄物の利用や、家畜糞尿の施用限界試験等が取り組まれました。また、県下農用地土壌の生産性分類調査等、地力保全調査が実施されました。

病害虫では、農産物の安全性志向が強まるなか、化学合成農薬を使用しない病害虫防除技術の確立が求められるようになり、天敵の利用や生物農薬の開発、防虫ネット等を利用した物理的防除技術の開発に取り組むとともに、病害虫の発生予察調査に基づく適期防除と農薬の安全使用技術の開発が進められました。また、ゴルフ場における農薬使用が社会問題となったのもこの頃でありました。

経営機械分野では、野菜栽培の定植機械や、収穫機械等の開発による機械化省力栽培技術の確立に重点が置かれ、農家経営の向上が推進されました。

その他、食品加工分野では、村おこしや女性起業家育成を目的に、地域特産物を利用したふるさと産品づくりの研究が各地から要望されました。

これら農業生産振興のための技術開発に加えて、最近では農業・農村の持つ多面的機能に関する研究ニーズが多くなってきています。山野の開発による里山風景の崩壊や、宅地開発による農地の減少農業者の高齢化と後継者不足による農地の荒廃等、農業離れによる田園風景の再生が求められています。これまでの農学分野の研究では対応できない、社会科学に属する試験研究ニーズが増えています。

国においてはこれらの課題を解決し、期待に応えるため、「農業基本法」に変わり平成11年に「食料・農業・農村基本法」を制定しました。国民生活・経済の安定、発展に向けて、食料の安定供給の確保、農業の多面的機能の発揮、農業の持続的な発展、農村の活性化と振興等を理念としています。

一方、兵庫県では平成13年3月「ひょうご農林水産ビジョン2010」を策定し、農林水産業の振興、暮らしと環境など、県民生活に貢献する兵庫の農林水産業と農山漁村のあるべき姿を提案しました。試験研究機関においてもこの実現に向けて試験研究に取り組むこととなりました。

平成13年4月、国の研究機関は行財政構造改革により、独立行政法人となり、基礎的研究と併せて現場対応試験を実施できる体制を整えました。

兵庫県においても、平成14年4月より農林水産部の試験研究機関、中央農業技術センター、北部農業技術センター、淡路農業技術センター、森林林業技術センター、水産試験場、但馬水産事務所試験研究室の6機関を統合し、新たな試験研究機関として出発することになっています。統合に当たってのキーワードは、技術情報提供行政サービス機関としての役割、農畜林水の横断的課題の推進、研究普及の連携強化等です。

我々兵庫県の試験研究機関に奉職する六篠会員は、協力しあって兵庫県農林水産業の発展に頑張る所存です。六篠会員諸兄のご支援とご鞭撻をお願いいたします。

総会報告

六篠会活動の構築に向けて
～総会を盛大に開催～

代表理事　中村　直彦

六篠会活動の構築に向けて

六篠会は、同窓会活動を通じて、大学と同窓会との交流、大学や同窓会を核とした同窓生間の交流を目指している。

現在、大学においては、国立大学の独立行政法人化への対応を迫られているところである。一方、卒業生の間でも、長引く不況、経済構造の改革などといった厳しい社会環境を、いかに乗り切るかということが、身近で大きな問題となってきている。その他、日常的なことにしても、仕事に行き詰まることが多いし、組織の中で潰されそうになったり、人間関係に息苦しくなったり、毎日が大なり小なりトラブルの連続である。

これらの多くの問題を解決する糸口は、「同窓生」にあるといっても過言でない。

これからは、神戸大学においては、大学の発展や人類への貢献を考えていくためには、行政や企業の知識、技術、情報を取り入れた産・官・学の連携を欠かすことはできない。また、一般社会においても、ヒューマニズムの視点に立って、物事を構造的に捉え、トラブルを処理する能力、将来を見据えて創造的に発展させる能力と科学的な判断力が必要となる。しかし、これらのこと全てを大学だけや一個人だけで対応し、解決できるものではない。大学や同窓会を核にして、教官、同窓生と連携を取ることによって、これら諸問題に立ち向かうことができるものと考えている。大学、同窓会に「リンク」することこと、同窓生同士が互いに「リンク」することは、広い世界の知的資源につながるということであり、問題に対する解答を見つけ出すことになるのである。

六篠会は、このようなネット化を図る工夫をしているところであり、近い将来には、他学部の同窓会とも連携をとって、全学的なネット化が図れることを期待している。

総会の開催・新役員の決定

去る5月19日（土）午後2時から、神戸大学農学部C101教室において、六篠会の総会が盛大に開催された。

懐かしい顔ぶれの同窓生、久しぶりにお会いする先生と席を同じくして総会の議事に臨む。総会の後は、3時30分から場所を変えて懇親会へ移った。終了後、誰かが仕組んだ二次会が待っている。クラス毎に、又は講座やクラブなどのグループに分かれ、4年ごとに開催される総会後の集いを楽しんだ。

(1) 功績者・功労者の表彰

議事に先立って、まず六篠会の新家　龍会長から挨拶。その後、兵庫県科学賞を受賞された津川兵衛先生と辻　荘一先生に、顕著な業績を上げ、農学部及び六篠会の名声を高めたとして、表彰状と記念品を贈呈した。続いて、六篠会の運営にあたり、会員の相互交流と農学部の発展に貢献され、永年、ご苦労を頂いた前会長の西川欣一様、前副会長の東　順三様、田中平義様に感謝状と記念品の贈呈を行った。

(2) 六篠会会則の改正

議長を、農学部生物環境制御学科の内藤親彦先生にお願いし、議事に入った。

本会が、平成9年度に代議員制へと移行したことに伴い、当時会則の大幅な改正を行ったが、その後、他学部の同窓会との関係、総会と代議員総会との関係などにおいて、会則の一部を改正する必要性が生じてきている。

会則の改正点は、①幹事の名称を理事と改めること、②役員及び代議員が任期の途中でやむなく退任し、後任者の選任に急を要した時には、代議員総会の議を経て後任者の選任ができるようにしたことである。

(3) 事業報告及び事業計画

引き続き、平成12年度事業報告と会計決算報告及び監査報告、さらに13年度事業計画案と予算案の審議を行い、いずれも上程案通り可決された。

詳細は、別項の庶務報告並びに決算書、予算書をご覧頂きたい。

事業の概要は、在校生の活動支援、学術振興支援や農学部運営にかかる支援など、ほぼ例年どおりの事業を実施したが、先に述べたように、今年度から功績者、功労者を称える制度を発足させた。今後もますます、同窓会活動の活性化、同窓生の交流促進に力を入れたいと考えている。

(4) 役員・代議員の改選

続いて、役員・代議員の改選に移った。ご承知のとおり役員の任期は2年、代議員のそれは4年となっている。(会則8条)

選出方法について会員に諮ったところ、役員会案の提示を求められた。役員会では、かねてから、世話を頂く方々の選任について、役員や教官から推薦をいただき検討してきたところであり、この原案を示したところ、原案どおり可決された。

新たに決まった役員と代議員は後記、庶務報告に記載した。

また、六篠会役員会の顧問として、西川欣一様、東　順三様、田中平義様に加え前会長の新家　龍様にお願いしたいと、事務局から提案したところ、満場一致で承認された。

今後、この新体制で六篠会のますますの発展に力を尽くしたいと考えています。

会員各位におかれましては、ご支援とご協力を賜りますよう切にお願いします。

兵庫県科学賞を受賞して

植物資源学科　津川　兵衛（兵A11回）

平成八年の秋には、兵庫県科学賞の受賞という思わぬ幸運が舞い込みました。受賞研究の題目は「緑化植物クズの防災機能の解明と実際への適用」です。

クズが土壌保全植物として優れている理由は次の諸点にあります。

一、クズの越年生部分、すなわち親根株から放射状に伸びる越年茎と、その節に発生した根群が、ちょうど地面に網を広げ、所どころを杭で留めたような形をとる。(網目状構造)これが地面を緊縛して、土壌流亡を防止する。

二、クズの当年生部分、すなわち大型に三小葉からなる葉を着生した当年茎が、厚い茎葉冠（草冠構造）を形成し、雨滴の衝撃を緩和する。また、網目状構造ならびに地表に堆積したクズのリターが表面流出を減少させる。

三、クズの根に着生する根粒は大気中の窒素を固定し、またクズが生産する大量のリターは土壌中へ還元され、ともに地力の向上を助ける。

受賞研究では

一、クズの自然群落と栽培群落を対象にして、土壌緊縛機能を有するクズの網目状構造の特徴を明らかにした。

二、自然・栽培両群落の草冠構造の特徴を明らかにした。

三、六甲山系南麓部において、尾根、崩壊地、その他土層が浅い所、あるいは痩せた土地で樹木が侵入しにくかったり、樹木の生育が悪い場所でさえも、クズはよく発達した群落を形成することを土壌・植生学的側面から実証している。

四、フィリピン・ピナトゥボ火山爆発による泥流被災地にクズを植栽して、泥流防止効果を確認した。

このように、足もとの雑草であるクズが国土保全に役立っていることを示したこと、また、外国からの雑草の導入の是非を判断しながら、海外の緑化、農薬開発にクズを利用したことが、評価を受けたものと思います。

長らく続けてきたクズの研究を受賞に結びつけることができたのは、絶えず励ましの言葉をかけて下さった恩師、先輩諸氏、クズの研究を手伝ってくれた当時の学生諸君、またとない機会を与えて下さった科学賞の推薦者、前農学部長加藤征史郎教授には、改めて感謝の意を表します。さらに、私の受賞に祝福の拍手をお送り下さった同窓生の皆様方には心よりお礼申し上げます。

自ら手がけたクズの研究の成果を、実際に使ってみたいという思いにかられて、フィリピン・ピナトゥボ火山爆発被災地の緑化のために、自からクズの種子を現地へ持参してから六年目に、私と手を取り合って歩んできた、兵庫県氷上郡山南町の（NPO）IKGS緑化協会（国際葛グリーン作戦山南）が、平成十年度兵庫県社会賞を受賞しました。この団体は、ピナトゥボ火山周辺に住む山岳少数民族アエタ族の支援に全力を注いでくれています。IKGSの受賞があってこそ、私の研究が真に実を結んだといえます。そして、気持ちを新たにして、次の目標である棚田保全の研究へと向かうことができました。

このたび、同窓会が本会報へ県科学賞受賞につき、寄稿する機会を与えて下さいましたお蔭で、お世話になった方々との出会いが懐かしく思い出されてきます。これらの方々との交流は、一生涯忘れることのできない喜びであります。

兵庫県科学賞を受賞して

応用動物学科　辻　荘一（兵Z12回）

昨年11月9日に兵庫県科学賞の受賞の栄誉に浴しました。兵庫県の畜産関係の技術者の方々、また、繁殖牛の飼育農家の方々など、多くの方のご協力によって支えられて得られた成果に対して贈られたものであり、まずもってその事に感謝いたします。また、本年5月19日には同窓会としての表彰を総会で行なって頂き、感謝の言葉もありません。

私は兵庫農科大学を卒業後、助手として同学に就職し、以後36年間研究に専念する機会を得ました。その間、純粋に学問的興味を追求する機会に恵まれ、尿素合成系を待たない動物における尿素合成系酵素の進化上の意味とその存在自体の持つ意義について研究を展開する事が出来ました。

最初は生化学、酵素化学を研究の手段として用い、その後、分子生物学が発展するにつれて、遺伝子工学的な手段を導入して、研究を展開してきました。今日に至るまで、必要の無い酵素蛋白質の遺伝子を生物が何故2億年もの長い間保存し、今日でも発現させているかという根本の疑問にはまだ、答えは出ておりませんが、研究は今後も継続して行くつもりです。

このように恵まれた研究環境はやがて終焉を迎え、現今は、社会的に意義のある研究をせよとの強い圧力が働いています。教官の評価は大学の外部からの資金の導入金額や特許取得数で行われるようになってきました。幸い、前段の研究で、いち早く、遺伝子工学的な手法を導入していましたので、他大学の同じような研究分野の講座に先駆けて、DNA育種に関わる研究を展開する事が出来ました。その結果、神戸大学は現在、家畜ゲノム研究の分野で、最先端の研究を展開し、そのリーダー的存在となっております。

兵庫県は但馬牛という世界に誇れる在来種を持つという特色があります。我々の研究室はこの好立地条件を生かし、但馬牛研究を大きな柱として、実用的な研究を展開しております。これまで、但馬牛を英文で紹介し、海外の雑誌に掲載された論文はありませんでしたが、我々がはじめて但馬牛の成り立ちから遺伝的構造の特徴までを明らかにし、初めてその詳細を、発表しました。また、但馬牛が抱えている遺伝学上あるいは育種学上の問題点を継続的に研究して、但馬牛関係者に、警告や改良指針を提示するなどの活動を行なってきました。

現在、我々のグループには5名の教官と21名の学生（博士課程、修士課程、学部学生を含む）が在籍していまして、但馬牛研究グループとして、一大研究勢力となっております。このような、研究勢力のバックアップを受けまして、前段の生物進化の研究と黒毛和種、特に但馬牛の研究に従事してきました。残念ながら、個々の研究の詳細を紙面の都合上、述べる事は出来ませんが、この「兵庫県科学賞」の受賞の栄誉が、神戸大学農学部応用動物遺伝学講座（旧家畜育種学）の研究活動に対して贈られたものであり、社会的に評価されたものであると認識し、ご支援をいただいた、関係者各位に御礼を申し上げる次第です。また、研究活動の継続には内部努力だけでなく、同窓生の皆様のご支援が大きな力となります。今後とも、先輩諸兄のご支援を宜しくお願いいたします。

「六篠会をふり返って」

六篠会顧問　東　順三（兵C1回）

神戸大学農学部の前身である兵庫県立農科大学が篠山町に開学した（昭和24年）当時は、同窓生の連携や親睦の手段がなかった。しかし、大学である以上は、同窓会を設けるべきであるとう意見が多く、一回生が卒業（昭和28年）して間もなく、農芸化学科が単独で同窓会らしきものを発足させた。まだ、会則も不完全なままで、会員から少額の会費を集めて、当面の行事としてパンフレットの名簿の作製と、壁新聞のような会報が出版され、ごく内輪に限られた活動であった。小生は卒業後そのまま大学に残った（農芸化学科、土壌肥料学講座）ので、当時の世話係をやらされたことを不確かながら記憶している。

その後、しばらくして農学科・畜産学科・農芸化学科の三学科が一体となって、兵庫県立兵庫農科大学（昭和27年改称）の同窓会が設立（昭和

30年）され、会則にのっとって、役員の選出、総会の開催、会費の徴集、名簿や会報の発行など、本格的な同窓会活動がスタートした。

学舎は、自然豊かな田園の城下町の篠山にあったが、わが国も戦後の食糧難を脱して高度経済成長を目指す時代となり、農政の方針も激変をきたし、米作は「増産」から「減反」に変遷した。これに対応して農学部の役割も食糧の増産よりも、環境の保全やバイオテクノロジーの開発に重点を置いた組織改革が迫られ、母校も園芸農学科・植物防疫学科・農業工学科・農芸化学科・畜産学科の五学科に改組された。（昭和39年）

それから母校は、神戸大学に国立移管されて（昭和41年）、現在の六甲台に学舎が移転した。必然的に単科大学から総合大学へと組織が変わり、同窓会も他学部との交流が進み、神戸大学学友会に参加して、神戸大学全体の同窓会活動に寄与し、また神戸大学クラブ（KUC）に個人的に加入して活躍してきた。

篠山学舎育ちの兵庫農科大学生と、六甲台学舎育ちの神戸大学農学部生の同窓会が一体となって、現在の六篠会が誕生した（昭和50年）。そして、六篠会報が創刊された（昭和52年）。

神戸大学農学部（旧兵庫農科大学）50周年記念事業が、現在の六甲台の農学部学舎で盛大に実施された（平成11年）

今後も神戸大学農学部の教官・学生が高度な研究・教育を目指して、一層の努力を重ね、母校がますます発展するとともに、同窓生のご活躍を期待しています。

思い出の「六篠会」

六篠会顧問　西川　欣一（兵A1回）

昭和二十四年、高い理想のもと、篠山の地に創立された兵庫農科大学は、昭和四十一年その長い役目を終えて国立移管され、神戸大学農学部となった。

振り返れば、国立移管に伴う学科の増設、県立農業短大の併合、新学部体制への移行、さらに移管後の大学院修士課程ならびに博士課程の設置等々、めざましい発展をとげながら、平成十一年、農学部創立五十周年を迎えた。来年平成十四年には、百周年を迎える神戸大学の一学部として、着々と研究成果をあげ、かつ優秀な人材を輩出している。

その間、同窓会は国立移管を契機に、兵庫農科大学、同短期大学部、神戸大学農学部のそれぞれの卒業生が統合一本化され、「六篠会」となった。六篠会初代会長として同窓会の活動を振り返ってみよう。

＊農学部創立二十周年行事

昭和四十四年五月の二十周年記念総会において、同窓会名を「六篠会」と改めて会員名簿を発行し、あわせて「兵庫農科大学史」（同窓会版）を出版した。

＊農学部創立三十周年行事

昭和五十四年五月十九日、雲一つない好天のもと、記念式典と植樹を行った。植樹の樹には「マテバシイ」を選んだ。これは「マテバシイ」が「待てば椎になるという意味を持ち、アスナロ同様、将来への希望を表す常緑樹である」ことに拠る。記念植樹に続いて六篠会主催の園遊会がおこなわれた。記念品として「農学部二十年の歩み」（写真集）、「農学部の四季」（絵葉書）、「会員名簿」の三点を発行した。

＊農学部創立三十五周年行事

記念行事の中で最も印象深いのは、昭和五十九年、篠山の兵庫農科大学跡地に、発祥の地記念碑を建立したことである。碑文はわれわれ卒業生の気概と、若き日々への郷愁を込めて「我らが青春ここにあり」とした。篠山市にとっても大切な存在であった農大の記念碑は、県が管理してくれることとなり、いつも美しく整備されている。記念品として「記念碑絵はがき」「立杭焼酒器セット」「会員名簿」を発行した。

＊新制神戸大学四十周年行事

従来、神戸大学では、同窓会行事は各学部毎に単独で行われていたが、平成元年は新制大学として全学部が四十周年に当たるということで、合同の行事として五月十五日、式典と記念講演会、園遊会が六甲台で開催された。

＊神戸大学創立九十周年行事

明治三十五年官立神戸高商の設立を神戸大学の設立基盤とし、九十周年に当たる平成四年五月十五日、神戸国際会議場で記念式典が、引き続きポートピアホテルで祝賀会が催された。祝賀会のハイライトは、今までの学生歌に代わって新学歌が誕生、発表されたことである。

定年後、同窓会会長を退任、同窓会会長としての行事は、九十周年が最後となった。

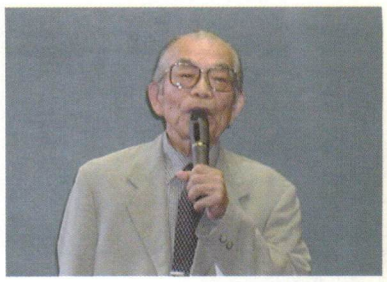
＊農学部創立五十周年行事

平成十年、十一年の二年に亘り、新家龍二代目会長のもと、盛大に行われた。平成十年十月には、各界で活躍する卒業生を招き、一週間にわたり六甲台講堂において記念講義が、平成十一年五月に式典、特別記念講演会、園遊会、記念植樹が、同六月に篠山において発祥の地記念学術講演会が開催された。

今年の定例総会において、思いがけず新家龍二代目会長より六篠会顧問の役職と感謝状を頂戴した。六篠会役員および会員各位のご厚情に感謝し、微力ながら今後とも同窓会のお役に立てればと願っている。

六篠会への回顧

六篠会顧問　田中　平義（兵C1回）



青春のかけらを置き忘れてきた町、丹波篠山から48年目、古希を過ぎた。「歳月は人を待たず。人は夫々歳月の切符を持って旅をし、年を重ねてゆく」フェスティナ、レンテ（ゆっくり急げ）という文句は誰しも知るところであるが、高齢者の社会をみるとき、今後生きがいのある生活が如何に可能か、また何処にあるかを見定め実行している昨今の自身でもある。5月に六篠会から感謝状をいただいた。平成元年当時副会長と兵庫県六篠会会長でもあり、この感謝状も県六篠会を代表していただいたものと思う。現在県六篠会会員は208名となり、その内OBが38名になった。会員各位は、行政、研究、普及教育と夫々の部門で主要ポストについて活躍されている。農学部の同窓会として直接または間接的に食料生産（農業生産）には重大な関心を持っておられると思うが、グローバル化する社会の中での日本の立場をどう位置づけるかが問題となる。今40年前を思い起こせば、主食玄米の価格は60kg当り4、200円、昭和60年では18、700円まで上昇した。平成13年では約15、000円前後となった。需要と供給に反映した米価であるかが問われているが、グローバル化を考えた場合、日本の稲作は玄米60kg当り9、000円で採算が合えば生き残れるとも言われている極めて厳しい現実がある。故に日本の農業を守るために、セーフガードが実行された。

平成2年、県OBとなり、引き続いて11年間肥料メーカーの技術顧問として現場を見てきただけに、複雑な思いがある。会員のメンバーにも広い視野に立って活躍されているインターナショナルな方々もおられると思いますが、その思いをお聞きしたいものである。

新六篠会会長に、県六篠会の北浦義久氏（県議会議員）が就任されました。県政を通して国の政策にも間接的に近い立場だけに、新たな視点から六篠会をリードしていただき、神戸大学農学部の発展に努力されるものと期待いたしております。2001年、節目の年にあたり改革が進む中で、学術研究のあり方、教育内容の変化とともに、産、官、学の連携強化が重要となり、六篠会の果たす役割も大きいものと思われます。

支部会だより

KOBE六篠会

岡野　光世（神A22回）

KOBE六篠会は、兵庫農科大学、兵庫県立農業短期大学及び神戸大学農学部を卒業し、神戸市に勤務する者を会員として、昭和59年に結成されました。

会の活動は、年1回の総会・懇親会の開催および名簿の発行となっており、役員は次表のとおりです。

現在、会員数は119名（正会員87名、OB会員28名、名誉会員4名）で、会員の主な勤務先は小・中学校（教職員関係）、保健福祉局（食品・環境衛生関係）、環境局（環境保全関係）、産業振興局（農政関係）、建設局（土木関係）などです。農業公園、フルーツフラワーパーク、六甲山牧場などの外郭団体や区役所で活躍している会員もおり、職場や仕事の内容は非常に多岐にわたっています。

総会・懇親会は、同じ市役所で働いているとはいえ、普段なかなか話をする機会がない会員同士が、職場や世代を越えて交流できる良いきっかけとなっています。また、相園農学部長、名武・尾崎・岩崎・加藤先生といった歴代の学部長の参加を得、さらに、六篠会の王子先生から学友会活動の報告など、大学の近況やなつかしいお話を伺うことができました。ありがとうございました。

役職名	氏　名	卒年・回生	所属(勤務先)
会　長	西尾　　司	43年・兵Z16回	環境局 環境審査室
副会長	畑沢　則雄	41年・兵A16回	監査事務局 第3課
副会長	谷口　正夫	43年・兵Z16回	産業振興局 農水産課
副会長	中村　直彦	45年・神Z1回	産業振興局 農水産課
幹　事	木股　昌行	45年・神Z1回	垂水区 保健部 衛生課
〃	菅原　通直	48年・神C4回	灘区 保健部 衛生課
〃	橋本　宏之	51年・神Z7回	保健福祉局 保健所 予防衛生課
〃	渋谷　一郎	52年・神C8回	市民局 消費生活課 生活情報センター
〃	高谷　信之	52年・神A8回	産業振興局 西農政事務所
〃	森川　功一	55年・神C11回	環境局 減量リサイクル推進課
〃	藤井　俊宏	58年・神C14回	保健福祉局 健康部 生活衛生課
〃	鈴木　壽也	59年・神P15回	産業振興局 西農政事務所
〃	松宮　道生	60年・神A16回	建設局 公園砂防部 計画課
〃	安藤　伸子	元年・神C20回	環境局 環境審査室
〃	岡野　光世	3年・神A22回	産業振興局 農政計画課
監　事	斎藤　允己	42年・兵A15回	淡河中学校
〃	岡　淳治	45年・神T1回	都市計画局 区画整理部 東部都市整備課
〃	千代　栄司	46年・神A2回	建設局 公園砂防部 施設課

県六篠会近況報告

松本　幹夫（神A3回）

「県六篠会」は兵庫県に勤務する（又は、勤務した）六篠会会員により、昭和56年に結成され、現在、会員208名（内現職会員163名）を数えます。

兵庫農科大学1回生から神戸大学30回生まで47年間、ほぼ毎年4人から5人が入会してきましたが、平成12・13年度は農学職の採用人数が少ないこともあり、入会がありませんでした。

本会の活動を活発にする上でも、来年度以降、多くの卒業生が兵庫県に入られることを切望しています。

さて、県では、21世紀初頭の兵庫の農林水産業・農山漁村の目指すべき姿を示し、その実現のための指針となる「ひょうご農林水産ビジョン2010」を策定しました。

その中で、「成熟社会を先導する生活産業としての農林水産業の展開」、「豊かな自然の中のいきいきとした交流のある多自然居住地域の創造」、「自然環境との共生をめざした食と農を楽しむアグリライフの創造」、「多面的機能の維持・保全とその活用」の四つのめざす姿を示し、各種の推進方策を進めることとしています。

このビジョンの策定に当たり、多くの同窓生が活躍しています。

本会の活動は年1回の総会兼懇親会と名簿発行のみですが、会員同士は、仕事の中で同窓生としての良き連携と緊張感の下、困難な仕事にも前向きに取り組んでいます。

今年は、10月24日に総会を開催しました。相薗農学部長、北浦同窓会長をお迎えし、農学部の近況や大学時代の昔話など、賑やかな会となりました。

平成13年度役員

会　長　荒木　斉　（兵13回）
副会長　置塩　康之（兵14回）
副会長　板井　丈夫（兵16回）
副会長　塩飽　是雄（神1回）

事務局

兵庫県農林水産部総合農政課
担　当　新岡　史朗（神11回）
電　話　078―362―3411

関東支部の近況について

支部長　和泉　孔庸（兵C8回）

関東支部は去る7月14日に東海大学校友会館で第4回の支部総会並びに懇親会を開催しました。

当日は約50名の会員が出席し、本部からは北浦会長、大学からは山本教授に出席していただき六篠会の活動状況並びに大学の現況等についてスピーチをいただきました。

懇親会では奥谷先生（旧昆虫学教授）の乾杯で始まり、和やかな雰囲気の中で団欒のひとときを過ごしました。

本年1月発行の六篠会報第15号でも紹介していますが、関東在住の神戸大学の全学部の同窓会がお互いの交流を更に深めていく目的で『神戸大学東京連絡会』が組織され、当支部からは上山（神3）、東野（神13）の両副支部長が六篠会の代表としてこの連絡会の運営に参画しています。

この連絡会の活動の一環として、昨年末より各学部持ち回りで『神戸大学木曜会』なる定例談話会を開催することになり、本年2月には農学部が主催することとなり、当日は丸ノ内にある『凌霜クラブ』で姫路工業大学の辻　啓介教授（兵12二）に『生活習慣病と食物繊維』と題して講演をいただきました。

健康で長生きをするには日々をどのように過ごすか等に豊富な事例、図表等を用いて講演をしていただき、他学部のOBも含めて約50名の当日の参加者には非常に好評を博しました。

この企画は今後も継続されるので、次回の農学部主催の時は各界で活躍されている会員諸氏に順次依頼したいと考えています。

また、この『凌霜クラブ』をビジネスあるいは友人、知人との会合等に利用していただきたいとクラブの責任者から要請されていますのでよろしくお願いします。

関東支部が設立されて3年が経過しましたが、会員各位の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

東海支部の近況について

副会長　上田　洋（兵C6回）

9月22日午前10時30分、遠くは三重県から愛知県半田市の名鉄半田駅前に、昭和29年卒の先輩をはじめ、平成4年卒の若手が三々五々集まって来た。旧知の方もおれば初対面の人ありと、早速自己紹介や名刺交換が始まった。集合した目的は、東海支部設立総会の行事の一環として行った地元の食酢メーカー（ミツカン酢）と酒蔵（中埜酒造）の見学会に参加するためである。酢のメーカーではお土産を戴き、酒造蔵では季節にあわせた何種類かの酒の試飲のほかに我々のために特別に大吟醸酒も準備して戴く等の歓待を受けた。

定刻午後1時15分、雁宿ホールで六篠会東海支部の設立総会が始まった。この設立総会を開催するのに、半年以上の準備期間を要したことになるが、一つの形が出来上がるのは本当に嬉しいことである。発起人各位に厚くお礼を申し上げたい。

さて総会には、兵庫県会議員の多忙な公務をさいて、北浦六篠会会長に遠路わざわざご出席戴いたのには感謝感謝である。

西浦氏（37年卒）の司会により、発起人を代表して正井氏（29年卒）から設立に至る経緯を、続いて北浦会長からは祝辞を頂戴し、併せて六篠会や農学部の現状等々、詳しく話して戴いた。

次いで、上田（33年卒）から六篠会東海支部規約の提案、第1期支部役員の提案を行い、出席者全員から拍手で承認され、次の通り決定した。

（敬称略）

会　長　正井　博之（29・食化）
副会長　上田　洋（33・食化）
副会長　前川　文男（36・農製）
会　計　西浦　隆司（37・農製）
監　事　長谷川信弘（43・農製）
（会計監査）
幹　事　谷口　正明（33・生化）
幹　事　神田　豊（44・植栄）
幹　事　小松　功孝（47・醸造）
幹　事　向坂　仁一（48・土木）
幹　事　北村　秀教（48・植病）
幹　事　岩崎　忠（53・果樹）
幹　事　岡田　庄治（53・圃機）
幹　事　水島　広善（04・産機）

このあと、計画では河合雅雄先生（元京都大学霊長類研究所長、元犬山モンキーセンター所長）の講話を予定していた。準備の段階では河合先生も快くお引き受け下さり、また先生ご自身も総会への出席を大変楽しみにしておられたが、残念ながら体調を崩され、やむなくのご欠席になった。参加者一同、一日も早い体調のご回復を願っている。

総会閉会後、席を変え、別室の懇親会場に移動、前川副会長の司会で懇親会が始まった。松原氏（32年卒）の乾杯発声のあと、各所で輪が出来、懐かしい篠山や六甲での想い出に話の華が咲き、あっという間に予定時間を大幅に超過する盛り上がりであったが、神田氏の一本締めで夕刻やっとお開きになった。

卒業年次や学科、そして利害を超えて、地域の六篠会員が一堂に集うのは、測り知れない大きな価値があると思うし、無形の財産でもあると思う。次回はさらに多くの方々にお集まり戴き、共に語り、親睦の輪を広げていきたいと願っている。

なお、今回の東海支部設立総会の連絡については、可能な限り漏れのないように通知し、更に9月初旬には念のため、中日新聞紙上に同窓会開催の連絡記事を掲載して周知を図ったつもりであるが、もし、連絡の届かなかった方がおられれば、お詫びをしたい。また反対に、今回、出欠回答を事務局に返送されなかった方で、次回以降の東海支部の会合や行事等の連絡を望まれる方は、左記の事務局までご一報願いたい。

事務局

〒475―0878
半田市東本町1―6
上田経営コンサルタント
事務所内
神戸大学農学部
六篠会東海支部事務局
☎0569―22―7755
FAX 0569―22―7671

※東海支部の範囲：愛知県、岐阜県、三重県

和歌山県支部結成はいつになるか？

宇杉　興一（兵A14回）

突然、大先輩（兵第一回生）のM氏から職場に電話が入った。用件は、六篠会の和歌山県支部を結成することになったという事だった。急な事で一瞬戸惑った。話を聞いて行くうちに、支部結成を決断された事情がだんだんと解ってきた。支部結成には会員が30人以上ということだが、これは、名簿を精査するなり、和歌山県ゆかりのものを探すなり、夫婦で会員になれる者が2組あるので、何とかなるだろうと思ったが、問題は、会報の支部だよりに原稿を期限内に書いて提出して欲しいという事だった。これには流石に躊躇せざるを得なかった。しかし、大先輩の厚意（？）を無視する訳にも行かず、引き受ける事になった次第であります。支部規約の作成は、M大先輩にお任せし、支部結成式の開催は、この原稿が印刷され、発行されるまでに出来る様、後輩のK君に依頼する事にした。こうしたことから、まだ正式な支部結成が出来ていない状態で、会報の支部だよりに掲載されることは、おこがましい限りでありますが、今まで1～2年に1回程度は同窓会を開催してきましたので、その状況をご報告させていただきます。

最近では、平成8年から昨年まで、毎年、県職員に採用された後輩があったので、歓迎会をかねて飲み会を行ってきました。今年は、残念ながら後輩が採用されなかったので、まだ開催していなかったが、運良く（？）支部結成という口実が出来たので、今年も開催できることになりました。

和歌山での同窓会が、いつ始まったかは定かではないが、もう10数年はたっており、卒業生の多い講座の先生を呼ぼうという事で、一井先生、前川先生、保田先生等にも出席いただいて開催した事もありました。

会員の勤務先は、県職員が多く、現在18人で会員の60％を占めています。和歌山市役所及び国立大学が各2人で、他は自営、専業主婦、悠々自適等です。出席常連の、働き盛りで故人となった会員もあり、哀惜の念、嗚呼。

私事ではありますが、公務で熊本県へ出張した際に、平成12年1月1日発行の会報で「熊本六篠会」の活動状況が載っていました様に、急遽例会を開催していただき、馬刺しと焼酎の歓迎を受けましたこと、遅くなりましたが、この紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。和歌山県支部の規約に同窓生が和歌山に来られた時は、臨時例会を開く旨を規定しようかなと思っています。たとえ、規定になくても歓迎したいと思っていますので、その節はご一報ください。

六篠会からのお知らせ

延喜会近況報告

会長　久下　平（兵C1回）

本年度の延喜会を、去る8月4日（土）17時より、神戸大学文理農キャンパス内瀧川記念学術交流会館にて、新家名誉教授、青木教授をお迎えし、15名出席して開催した。

総会兼懇親会に先立ち、菊正宗酒造株式会社の古川恵司氏より「清酒醸造におけるイノシトールの成因と酵母への影響」の講演を聞いた後、総会兼懇親会に入り、現在の酒類業界の現状を話し合い懇親を深め有意義な会となった。

尚、当会の役員は全員留任、総会は土曜日は集まりが悪いので、よく考えて日程を世話係で決定することを確認し散会した。

六篠会支部活動に本部から援助

代表理事　中村　直彦

六篠会の本部に対し、それぞれの地域で支部が結成されて、同窓会活動が、次第に活発に行われつつあります。

現在、設立されている支部は、神戸市役所の「KOBE六篠会」、兵庫県庁の「県六篠会」、醸造学教室の卒業で酒造会社に勤務する「延喜会」、関東地域一都六県に在住在勤する「関東支部」、また、今年度9月に結成された「東海支部」があります。目下、和歌山地方、九州地方で支部設立の動きがあり、関係者に努力して頂いているところです。

支部が設立されると、本部から支部に対し必要な情報を提供するとともに、年間10万円を限度として運営費の助成を行います。（運営費の助成は、当分の間といたします。）

支部認定の要件は、同一又は同種の企業等で作る「職域支部」や同一地域で作る「地域支部」によって組織化をはかり、会則を作って30人以上の会員で構成し、年1回以上の総会を開くこととなっています。

今後、各地で多くの支部が設立され、同窓会活動がますます活性化していくことを期待しています。

学友会だより

学友会理事　西川　欣一

学友会は、神戸大学各学部同窓会を一本化した共同体で、神戸大学の公的行事に関して協議する会である。毎年6月と12月に学長、副学長をお招きして定期幹事会を開催するほか、必要に応じてその都度、臨時協議会を開いている。

今年の最大目標は、平成14年5月15日に神戸大学百周年記念行事を行うことである。

以下に「六篠会報」15号（平成13年1月1日発行）以後の「学友会だより」をお伝えする。

神戸大学百年記念館竣工式

神大90周年に、100周年までに完成させる予定で募金を呼びかけ、その寄付金の大部分を投じて建設中であった「神大百年記念館」が見事完成し、平成13年1月27日、竣工式がはなばなしく開催された。

この記念館は、神大創立百周年記念事業の一つで、三つの新施設、すなわち神大会館、留学生センター、山口誓子記念館が一体となった建造物である。

竣工式当日は、チェンバリストの上野昌子さんの記念演奏会と共に、山口誓子展、神大前身校史展が併催された。

神大百年記念館（イメージ・デッサン）

山口誓子記念館

神大百年記念館（南面）

新学長・副学長の誕生と励ます会

2月16日付けで、発達科学部（前教育学部）から野上智行新学長が、医学部と法学部から石川斎、浦部法穂両副学長が選出された。

学友会として学長・副学長を励ます会を催したが、これは学長選出母体である発達科学部同窓会（紫陽会）が中心となって行われた。

学友会役員の一部改選

定期幹事会において学友会の役員の一部が改選された。

・会長

新野幸次郎　凌霜会理事長　留任

・副会長

難波　昭　紫陽会会長　留任

島　一雄　KTC副理事長　新任

・監査

高木　恕司　くさの会会長　新任

三宅　陽子　文同窓会副会長　新任

・幹事（六篠会）

王子　善清　学友会理事　新任

西川　欣一　学友会理事　留任

他学部の幹事名は省略する。

神大創立百周年記念行事

学友会定期幹事会の席上、石川副学長より、大学当局において目下記念事業を予算規模3億円でとりまとめ中であり、趣意書等が出来次第、各学部同窓会へ連絡する旨の報告があった。

その節は六篠会の会員各位のご協力を切にお願い申し上げる。

神大クラブ（KUC）に入ろう

KUC理事　中村　直彦

同窓会のネットワーク化の一つに神大クラブがあります。

神大クラブは、神戸大学の卒業生のサロンであり、学部や世代を越えて、同窓生の交流と親睦を図る場となっています。知的交流を図ったり、仕事の取引・連携、同窓生や同僚との親睦など、活用の仕方は様々です。会場に顔を出せば誰かに会えるので、話題も増え、交流の輪が広がります。

場所は、神戸ハーバーランドのオーガストプラザ17階、レストラン「ザ・ハーバースカイ」。

神大クラブでは、定期的に講演会、音楽会、演芸会、ビアパーティを開催するほか、海外ツアーを企画し、交流と親睦の促進を図っています。この海外ツアーは、好評のため、本年度で第4回目を迎え、12月に「アンコールワットとアユタヤ遺跡・バンコク」へ行きます。

☆入会資格

資格は、神戸大学の卒業生及び教職員。入会金は1万円、年会費が6千円。

☆会員の特典

各種催しの案内、指定レストラン・旅行代金・ゴルフ練習料金の割引のほか、神戸おくさま新聞の「結婚相談室」が特別料金で利用できます。

「結婚相談室」のお問合わせは、

☎078（794）3041

☆入会・お問合わせ

神大クラブ事務局（ザ・ハーバースカイ内）

☎078（361）8451

ビアパーティに集う会員

神戸大学創立百周年記念事業への協力のお願い

学友会理事　王子　善清

神戸大学は、高等教育機関として明治35年に設立された官立神戸高等商業学校を創立基盤として、平成14年には創立百周年を迎えます。昭和24年に新制神戸大学として新たに出発した後も、我が国屈指の国立総合大学として、10学部を擁するまでに成長し、優れた研究業績を挙げるとともに、幾多の有意な人材を各方面に送りだし、国家社会の発展に大きく貢献しておりますことは、同窓生各位のご存知のところであります。

これもひとえに関係各位のご尽力、ご支援の賜であり、誠にご同慶に耐えません。

しかし、昨今の国立大学を取り巻く環境はかつてないほどの厳しさで、神戸大学にもそのアイデンティティーの確立を迫ってきております。21世紀を生き抜くためにも今後百年の神戸大学の姿を、いま描かねばなりません。このような時に創立百周年を迎える神戸大学のさらなる発展を支援するため、神戸大学学友会（各学部同窓会の連合体）が大学側との緊密な連繋のもとに「神戸大学百周年記念事業」の後援を決定いたしたところであります。

記念事業の概要は、同封の趣意書の通り、平成14年5月11日（土）に「21世紀の知のマネジメント」を議論するシンポジウムの開催、並びに創立90周年事業での関係各位の浄財で建設された百年記念館を活用した国際シンポジウム開催や海外提携校との交流促進のための「基金」の設置であります。

六篠会会員各位には、すでに創立90周年の記念事業において、百周年を先取りしたかたちで募金をお願いいたした事情もあり、今回は同窓生の皆様の「草の根」募金に頼らざるを得ません。

会員各位には、何かと出費ご多端の折りとは存じますが、事情ご賢察の上、神戸大学の発展を支援するための募金にご協力下さいますよう、お願い申し上げる次第です。

PFI手法の導入による「神戸フィッシャリーナ」の整備について

中村　直彦（神Z1回）

神戸フィッシャリーナ

1. はじめに

昨今の長引く不況、財政の逼迫と公共事業の非効率性が指摘される中で、国や地方公共団体では、財政支出の削減や行政活動の効率化を目指すとともに行政需要の増大と多様化に応えるため、行政と民間の役割と責任を明確に分担し、民間において行うことが適切な仕事は民間に委ね、民間の積極的な事業展開を推進するものとして、PFI（Private Finance Initiative）の活用を進めている。即ち、民間の資金、経営能力及び技術力を活用して、民間において公共施設等の建設や維持管理と運営を行い、効率的で効果的な社会資本の整備や低廉で良質な公共サービスを提供しようとするものである。

PFIは、1992年にイギリスにおいて導入されたのが始まりで、道路、鉄道等の運輸関連のほか、病院、スポーツ施設や刑務所等にも導入されている。

わが国においては、平成11年7月30日に「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律」が制定され、全国的にPFIを取り入れた事業が模索されており、一部、事業実施に移されているところである。

2. プレジャーボートを取り巻く状況

近年、国民の生活水準の向上、余暇時間の増大とアウトドアブームを反映して、海洋レクリエーションのニーズが高まっている。とくに、小型モーターボートの低価格化、つり等の海洋レジャーの普及により、プレジャーボートの隻数は著しく増加している。このプレジャーボートは、全国で約34万隻存在しているが、これらが公共水域に放置されている場合は少なくなく、その隻数は約14万隻ともいわれ、うち漁港に放置されているものは約3万隻にのぼっている。

こうした公共水域における放置プレジャーボートが深刻な社会問題を引き起こしていることから、港湾法（H11.5.28）海岸法（H12.3.31）漁港法（H12.5.19）などの水域管理法が改正され、管理水域における船舶等の放置・廃棄等の禁止区域の指定、放置・廃棄船舶の監督処分規定の整備等によって厳しく規制されることになった。

また、明石海峡は、潮流が早く、絶好の漁場となっていることから、古くから遊漁愛好家が多く、近年になって、垂水漁港に放置するプレジャーボートが目立ち、漁船との漁港利用上のトラブルが発生するなど漁業生産活動に支障を与えてきている。

そのため、この垂水漁港で放置されている50隻のプレジャーボートを分離・収容することにより漁港施設の適正な維持管理をはかり、漁業の振興と合わせて海洋レクリエーションの普及に寄与するため、マリンピア神戸整備の一環として、プレジャーボート係留施設を建設することにした。

3. PFI手法の導入による「神戸フィッシャリーナ」整備の目的と効果

平成7年1月の阪神・淡路大震災とその後の長引く不況によって、神戸市の財政事情は、著しく厳しい状況であることから、防波堤等の基本施設の整備は進めてきたが、収益施設であるプレジャーボートの係留施設の整備は見送ってきた。

また、フィッシャリーナの整備にかかる資金調達、施設の設計、建設から運営にいたるまでを、民間において実施する方が経費の効率、市民サービスの向上に結びつくことになる。このようなことから、神戸フィッシャリーナの整備を、PFI手法を導入して行うこととした。

（目的・効果）

（1）放置プレジャーボートの収容と一般プレジャーボートの誘致

放置プレジャーボートの解消のためには、実効性ある規制措置とPFI事業として整備した係留施設に、放置プレジャーボートを適切に収容することが必要である。このことにより水域の適正利用と漁業活動の円滑化をはかり、合わせて一般プレジャーボートの誘致による海洋レクリエーションの普及に寄与することができる。

（2）財政負担の縮減

神戸市が、直接に事業を実施した場合に比べ、PFI事業として実施したときの方が市の財政負担の縮減をはかることができる。

（3）民間へのリスク移転と公共の支援

民間が、事業運営を行うにあたりリスクを負担することになるが、このなかで、神戸市と民間が適正な役割分担とリスク分担を行うことにより、健全な事業が期待できる。そのため、神戸市は、民間が事業展開できるようにプレジャーボート所有者、漁業者、地元住民との事業調整のほか、基本施設の整備などの条件整備により公共支援を行うものである。

（4）利用者サービスの向上

民間の専門的な技術と経営ノウハウを活用し、利用者のニーズに対応した質の高いサービスを提供でき、利用者が、安全で快適な水域や施設を利用することができる。

（5）マリンピア神戸の魅力の付加と活性化

マリンピア神戸は、雄大な明石海峡大橋を望むウォーターフロントが魅力の一つとなっているが、未完成となっているフィッシャリーナの早期整備と活用が大きな課題となっている。

係留施設の整備と管理・運営によって、ウォーターフロントの一層の推進、船をバックグラウンドとしたロケーションの形成や憩と安らぎの場の確保が可能となり、マリンピア神戸そのものの魅力の付加と活性化をはかることができる。

（6）民間の投資誘発と地域経済の活性化

民間による係留施設の整備等にかかる投資誘発とともに、その管理・運営にかかる事業展開によって地域経済の活性化をはかることができる。

工事前の神戸フィッシャリーナ

4. 「神戸フィッシャリーナ」事業の概要

（1）施設等の概要

①名　称
神戸フィッシャリーナ

②場　所
神戸市垂水区海岸通12
（マリンピア神戸内）

③施　設
・水域面積約10、000㎡
・プレジャーボート収容隻数
長期係留施設　142隻
一時係留施設　5隻
・浮き桟橋　約400m
・渡り橋（タラップ）4カ所
・転落防止柵　約330m

④係留料（使用料）
利便性、景観等の立地条件が優れているものの、クラブハウスや陸揚げ施設等の便益施設を備えずに管理内容を簡素化にしたことに伴い、周辺にある同様の施設に比べ、やや安い価格帯を設定した。

⑤事業期間
平成13年10月1日から
平成34年3月31日まで
（供用開始：平成13年10月1日）

（2）事業の枠組み

神戸市は、神戸フィッシャリーナの建設にあたり、関係機関、地元関係者との事業調整をはじめ、基本施設としての防波堤等の建設といった、民間事業者の参加しやすい条件を整備し、係留施設等の建設及び管理・運営を民間事業者に委ねることとした。

さらに、神戸市が目的としている放置プレジャーボートの収容以外に、一般プレジャーボート係留施設の整備をも可能とすることにより、民間事業者の事業採算性を確保し、独立採算型の事業形態を採用する枠組みとした。

具体的には、PFI事業として選定された民間事業者は、自己資金や金融機関からの借入れ等によって事業資金を調達し、それによって神戸市から提供を受けた水域にプレジャーボートの係留施設等を建設し、以降、約20年間に渡って維持管理及び運営を行うものである。

神戸市は、民間事業者が建設した係留施設等を借上げ、この施設の維持管理及び運営を民間事業者に委託することにしているが、神戸フィッシャリーナ条例に基づき、プレジャーボート利用者から納付された係留料を上限に、施設管理料として、係留施設等の借上げ料並びに維持管理及び運営にかかる費用を民間事業者に支払うことにしている。

また、神戸市は、神戸市漁港管理条例に基づく物揚場の使用及び漁港法に基く水面の占用について民間事業者に許可するとともに、民間事業者は、水面占用料を神戸市に支払わなければならない。

なお、民間事業者は、契約期間終了後は、自らの費用で係留施設等を撤去し、原状回復することにしており、事業方式としてはBOO方式ということになる。

（3）事業のスケジュール

神戸フィッシャリーナの事業推進は、PFI法に基き、表一のとおり実施した。

なお、PFI事業が、透明性と公共性を確保する意味から、その都度、一般に公表した。

表一　事業スケジュール

事業の内容・実施日

実施方針の策定	平成13年2月28日
特定事業の選定	平成13年3月16日
民間事業者の募集	平成13年3月16日から30日
民間事業者の受付	平成13年5月7日から11日
民間事業者選定審査委員会	平成13年5月25日・30日
民間事業者の選定	平成13年6月5日
神戸フィッシャリーナ条例の制定	平成13年7月4日
契約の締結	平成13年7月5日
工事着手	平成13年7月5日
プレジャーボート利用者の募集	平成13年7月14日から8月6日
工事竣工	平成13年9月28日
供用開始	平成13年10月1日

5. おわりに

神戸市が税金を投入することなく実施する神戸フィッシャリーナ事業は、農林水産省の関係事業において、また海洋レクリエーションの分野において、全国で初めてPFIを取入れた事業であることから、全国的にも注目を集めているところである。

神戸フィッシャリーナ事業についていうならば、PFI手法を導入して事業を実施する場合は、市が直接に実施する場合に比べて市の財政負担が約25％縮減でき、さらに、サービス水準の定性評価にあっても、民間事業者の持つ専門的な技術、ノウハウや創意工夫によって、事業効率の向上が期待でき、VFM（Value For Money）の達成が見込まれた。

今後、PFIが、社会資本の整備、行財政の改革、経済活動の活性化をはかるうえで、今日の悩める日本の社会経済の構造を改善する救世主となることを期待している。

また、神戸フィッシャリーナ事業を契機として、全国に多数放置されているプレジャーボートを適切に収容する係留基地の建設が進み、水域の適正な利用と漁業の振興が促進されることを強く望んでいる。

平成十二年度　庶務報告

庶務理事　水野　雅史

平成13年5月19日に4年に一度の六篠会総会が参加者総数約60名で行われ、新役員（任期は、平成13年～14年まで）および代議員（任期は、平成13年～16年まで）が選出されました。その詳細は以下の通りです。

六篠会新役員

会　長　北浦　義久（兵A6）
副会長　久下　平（兵C1）
副会長　能宗　康夫（兵C2）
副会長　杉本　金五（兵Z5）
副会長　常深　邦晃（兵Z12）
副会長　西尾　司（兵Z16）
理事（代表理事）　中村　直彦（神Z1）
理事（副代表理事）　松本　幹夫（神A3）
理事（庶務）　水野　雅史（神C15）
理事（会計）　原山　洋（神Z18）
理事（会報）　吉倉惇一郎（兵C16）
理事（会報／名簿）　芦田　均（神C14）
理事（会報）　岡野　光世（神A22）
理事（名簿）　松本　幹夫（神A3）
理事（名簿）　菅原　道直（神C4）
理事（学友会）　西川　欣一（兵A1）
理事（学友会）　王子　善清（兵C12）
理事（KUC）　能宗　康夫（兵C2）
理事（KUC）　石賀　暢一（神C1）
理事（KUC）　中村　直彦（神Z1）
監　事　中田　昌伸（兵C10）
監　事　外山　真理（神C9）
顧　問　東　順三（兵C1）
顧　問　田中　平義（兵C1）
顧　問　西川　欣一（兵A1）
顧　問　新家　龍（兵C5）

六篠会新代議員

松浦　良彦（兵A1）
久保　一兵（兵C2）
藤中　勤（兵Z4）
中澤　啓一（兵A7）
津田　安啓（兵C8）
小田垣博三（兵A9）
酒井　修（兵A9）
櫻井誠次郎（兵Z10）
坂井　永利（兵A12）
永吉　照人（兵A13）
池田　吉一（兵A13）
松井　功（兵T16）
塩田悠賀理（兵P17）
得丸　哲士（神Z2）
武　正興（神C3）
天野　孝司（神Z7）
矢代　学（神P10）
東　哲司（神A17）
門脇　織江（神P17）
向井　信之（神T18）
谷河　賞彦（神P21）
阿部　永子（神Z21）
宇野　雄一（神A22）
鈴木　武志（神C23）
丸橋　康弘（神P23）
竹中　慎治（神C24）
田中　学（神T27）
坂上　昭弘（鶴3）

平成12年度の一般事業として会費納入促進、会報発行、各支部活動・学友会・KUC援助、農学部および農場活動援助、六甲祭援助、20kmマラソン援助、学内図書購入援助、退官教官記念品贈呈、卒業証書筒贈呈、卒業祝賀会援助、名簿作製準備、慶弔関連などを行いました。また、学術振興事業関連では、会員の海外渡航援助として、6名（渡航先：カナダ、オランダ、フィリピン、フランス、アメリカ、オーストラリア）に、農学部の学術講演会援助として、応用動物・植物資源・生物環境制御学科主催の学術講演8件に対して、援助を行いました。

平成13年度の活動についても、例年同様、一般および学術振興事業活動を維持していくことが総会で承認されましたので、それに基づき現在活動を開始しているところであります。

慶弔記録

以下の方々がご逝去なされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（敬称略）

大平　恭造（旧教官）
豊田　正也（兵C7回）
堀江　格郎（旧教官）
波多野敬二（兵C10回）
丸山　輝樹（兵A4回）
市原　直征（神P26回）
後藤　定年（旧教官）
安原　昭江（現教官）

退官、転出並びに着任教官

退官、転出および着任された先生方をお知らせします。（敬称略）

退官された教官

中野　政詩（地域環境科学）
Le Dina Don（生物制御学）

転出された教官

鬼頭　誠（琉球大学へ）

着任された教官

上曽山　博（動物機能調節学）
河端　俊典（地域環境科学）
滝川　浩郷（生物機能分子化学）
鈴木　康生（園芸資源学）
本田　和久（動物機能調節学）
畠中　知子（資源植物学）

六篠会　平成12年度一般会計決算

収入	8,874,393円
支出	7,158,331円
残高	1,716,062円

収入の部（円）

項　目	予算額（円）	決算額（円）	増減（－:減）	備考
入会金	5,000,000	4,800,000	-200,000	3万円×160名
雑収入	4,000	31,229	27,229	利子、名簿売り上げなど
前年度からの繰越金	4,043,164	4,043,164	0	
合　計	9,047,164	8,874,393	-172,771	

支出の部（円）

項　目	予算額（円）	決算額（円）	増減（－:減）	備考
農学部農場援助費	550,000	550,000	0	環境美化など
一般事業費				
会報発行費	2,000,000	1,431,648	-568,352	
各種活動援助費	500,000	510,000	10,000	支部活動助成など
学生図書購入費	250,000	250,000	0	
卒業記念祝賀	350,000	341,160	-8,840	
学術振興基金への繰出	2,000,000	2,000,000	0	
一般事務費	1,000,000	498,705	-501,295	事務アルバイト代、通信費など
会議費	300,000	387,869	87,869	
旅費	100,000	30,530	-69,470	
慶弔費	300,000	140,859	-159,141	
交際費	230,000	156,560	-73,440	KUC活動など
褒賞費	100,000	0	-100,000	
役員活動費	630,000	630,000	0	
神戸大学学友会費	110,000	231,000	121,000	年会費、神大会館データベース学部分担金
予備費	627,164	0	-627,164	
支出合計	9,047,164	7,158,331	-1,888,833	
次年度繰越金	0	1,716,062	1,716,062	
合　計	9,047,164	8,874,393	-172,771	

六篠会　平成12年度学術振興基金決算

収入	36,164,568
支出	556,000
差引残高	35,608,568

収入の部（円）

項　目	予算額（円）	決算額（円）	増減（－:減）	備考
前年度からの繰越金	34,132,899	34,132,899	0	
一般事業からの繰入	2,000,000	2,000,000	0	
雑収入	90,000	31,669	-58,331	
合　計	36,222,899	36,164,568	-58,331	

支出の部（円）

項　目	予算額（円）	決算額（円）	増減（－:減）	備考
海外学術活動援助費	400,000	396,000	-4,000	
学術活動援助	400,000	160,000	-240,000	
予備費	500,000	0	-500,000	
支出計	1,300,000	556,000	-744,000	
保留金	34,922,899	35,608,568	685,669	
合　計	36,222,899	36,164,568	-58,331	

六篠会　平成13年度一般会計予算

収入の部（円）

項　目	12年度予算（円）	13年度案（円）	増減（－:減）	備考
入会金	5,000,000	5,000,000	0	
雑収入	4,000	4,000	0	
学術振興基金からの繰入	0	2,000,000	2,000,000	
前年度からの繰越金	4,043,164	1,716,062	-2,327,102	
合　計	9,047,164	8,720,062	-327,102	

支出の部（円）

項　目	12年度予算（円）	13年度案（円）	増減（－:減）	備考
農学部・農場援助費	550,000	550,000	0	
一般事業費				
会報発行費	2,000,000	2,000,000	0	
各種活動援助費	500,000	700,000	200,000	学内花壇維持費、東海支部援助など
学生図書購入費	250,000	250,000	0	
卒業記念祝賀	350,000	350,000	0	
名簿買い取り	0	1,500,000	1,500,000	2,000円×700冊など
総会経費	0	800,000	800,000	郵送費など
学術振興基金への繰出	2,000,000	0	-2,000,000	
一般事務費	1,000,000	700,000	-300,000	事務アルバイト代、通信費など
会議費	300,000	300,000	0	
旅費	100,000	100,000	0	
慶弔費	300,000	300,000	0	
交際費	230,000	230,000	0	
褒賞費	100,000	100,000	0	
役員活動費	630,000	590,000	-40,000	
神戸大学学友会費	110,000	110,000	0	
予備費	627,164	140,062	-487,102	
支出合計	9,047,164	8,720,062	-327,102	

平成13年度　六篠会学術振興事業

収入の部（円）

項　目	12年度予算（円）	13年度案（円）	増減（－:減）	備考
前年度からの繰越金	34,132,899	35,608,568	1,475,669	
一般会計からの繰入	2,000,000	0	-2,000,000	
雑収入	90,000	90,000	0	
合　計	36,222,899	35,698,568	-524,331	

支出の部（円）

項　目	12年度予算（円）	13年度案（円）	増減（－:減）	備考
海外学術活動援助費	400,000	400,000	0	
学術活動援助	400,000	400,000	0	
一般会計への繰入	0	2,000,000		
予備費	500,000	500,000	0	
支出計	1,300,000	3,300,000	2,000,000	
保留金	34,922,899	32,398,568	-2,524,331	
合　計	36,222,899	35,698,568	-524,331	

六篠会活動への参加にご協力ください！

同窓会の活動方針や活動内容については、先に述べてきたところです。

役員をはじめ教官の奉仕的な活動によって同窓会事業の円滑な運営に努力していますが、限られた予算ですので、活動範囲や事業内容にも限界があります。

このような中で、在校生の活動支援、学術振興支援や農学部運営にかかる支援をはじめ同窓会全体の交流と親睦を図るために各種事業に取り組んでいます。

今後とも、農学部の発展、六篠会の基盤強化と活動の活性化、さらには開かれた同窓会活動を目指し、事業を展開していくことにしております。ついては、同窓生の中で、同窓会活動への参加や応援に協力していただける方や、建設的な意見や要望のある方は、ご連絡ください。お待ちしています。

連絡は、別に記載のFAXか手紙若しくはE－mailで、住所、氏名、卒業年次、所属の学科・講座を記入の上、下記事項などについて、参加・応援できる内容、意見・要望を具体的に書いて送付ください。

①事業活動に労働力を提供できる。
②事業に技術的、金銭的な援助ができる。
③事業の企画・内容への提案
④会報に掲載の原稿の提供
⑤その他

編集後記

六篠会会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。本年5月に会報と名簿の業務を引き継ぎ、右も左もわからない状態でスタートしましたが、会報は執筆者の皆様方のご協力により、例年になく原稿の集まりが早く、またボリュームアップをすることができました。原稿を頂戴した皆様方にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

来年は内容・構成も刷新していければと考えています。つきましては、農学関連分野に限らず、各界でご活躍の同窓生や海外に活動拠点を設けておられる方々の記事、エッセイ、コラム記事などの原稿を六篠会事務局まで左記のFAXあるいはE－mailでお寄せください。また今までどおり、住所変更等も受け付けておりますのでその際にはご連絡ください。

新しい世紀の最初の年が暮れようとしておりますが、会長の原稿にもありますように世の中は必ずしも平穏ではありません。我が農学部に目を向けましても、学部長の原稿にありますように、農学部は創造的発展の過渡期にあり激動の時代を迎えつつあります。

今年発行の名簿に研究室の変遷を載せましたが、近年の変遷の頻度は高くなってきています。変遷は組織の名称だけにとどまらず、研究室の所在にも及んでいます。大学院のプロジェクト研究の設立に伴い、いくつかの研究室が11月初頭に農学部から新築された大学院棟に居を移しました。完全な移動は未だ若干の時間がかかりますが、学生の研究室は引越しが終了しました。このような大規模な移動は、同じキャンパス内とはいえ、篠山の地から六甲台に移って以来ではないでしょうか。

筆者の研究室も引越しをして、この原稿を書いている横では学生達が旧研究室との惜別と新研究室への移動終了を祝して一献傾けております。長らく一つの学び舎で、それぞれの研究室が結束して歩んできましたが、これからは既存の学舎を中心としてサテライト状に研究室が分散することになります。今後の変遷を年1回ではありますが、この会報を通じて会員皆様方にお知らせしてゆきたいと思います。

新たに迎える年が、皆様方にとって、また農学部にとって良い年となりますことを祈念しております。（H．A．）

会員の皆様からの本会への御連絡を主としてFAXで受付けております。また、コンピューターの導入に伴い、新たにe-mailでの受付も行っております。住所や連絡先の変更、また本会に対する御要望、御意見など御待ちしております。なお、御連絡の際には、所属学科と卒業年次を併せてお伝え頂くようお願い申し上げます。

FAX
078-881-2752
E-mail
rikusou@ans.kobe-u.ac.jp